



## 年間第 33 主日 (ルカ 21:5-19)

苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む(2)

皆さんは NHK の連続テレビ小説、続けてご覧になっているでしょうか。ただ今放送されている「ごちそうさん」のここ数日の放送分、わたしはまともに観ることができず、つい感情的になって観ています。

ご覧になってない方のために、夫のもとに嫁いできたヒロインがやって来た家には、人当たりがとてもきついお姉さんが居座っていました。ことあるごとに嫁に難癖を付け、覚えているだけでも2回、泣きながら「こんな家、出て行ってやる！」と家を飛び出しました。これはドラマで、作り話だと思っはいますが、お姉さんのことを心の中で「ひどいやっちゃんあ」と思ってしまい、観てられませぬ。

テレビを観ていて思ったのですが、苦しみと言いますか、迫害というものは、案外近くにあるのかも知れませぬ。最近小さな迫害を感じていまして、高井旅のミサで、マイクのスイッチが入ってなくて、侍者に「マイク、マイク」と伝えたのです。身振り手振りまで交え、そのうちわたしは頭に血が上ってきました。ところがその侍者は「え？何ですか？」とポカンとしています。わざとなのかとすら思いました。

また、堅信式直後の浜串中学生のけいこで、堅信の秘跡を受けてどう感じたか、本人に感想を聞いて後輩の1年生にも来年への楽しみを繋いでもらおうと思ったのです。けれども聖堂は真っ暗で電気が付いていませぬ。どういふことだと玄関の電気を付けたら、堅信をこの前受けた2年生が真面目に来てくれていて、「1年生はどうした？」と聞くと「明日から試験なので、来てないんですかね」と言います。ボイコットです。

前もって「来ることができません」と連絡があつて、「明日から試験なら、今日は休もうか」といふことでしたら分かりますが、最初から決めつけてボイコットするのです。わたしはやる気を失い、その日のけいこを休んでしまいました。これもちょっとした迫害であります。

ほかにも、「毎回使う物なのに、なぜ用意されていたり用意されていなかつたりするの？」とか、「いくら何でも無くなつたら無くなつたと言ふでしょう」といふようなことがありまして、まさに連続テレビ小説よろしく「きついなあ」と感じてしまうことがあります。何か機会があつたときに言つたりもしますが、これは現代の迫害なのだと思つと、「忍耐するしかない」と諦めにも似た気持ちになるのです。

今週の福音は、「苦難があり、そこで忍耐を学ぶなら、希望が開ける」こんなことを学ばせようとしていふかのようです。イエスは話の結びとして、次のように仰います。「忍耐によつて、あなたがたは命を勝ち取りなさい」(21:19)。忍耐について学ぶなら、わたしたちの未来には希望が待っています。今週、忍耐について学ぶことにいたしましょう。今週の説教の内容は、2004年のものを参考にしています。

きつと皆さんは、弱音を吐いていふわたしなど及びもつかないような忍耐を、ふだんの生活の中で経験していふに違ひありません。夫婦で一つ屋根の下にいれば、いふろんなこととどちらか一方は我慢していふ、忍耐していふといふことがたくさんあるのだと思ひます。夫婦と言ひま

したが、それは親と同居している場合にもあるでしょうし、子どもと暮らすなかでも気持ちよく過ごせる日ばかりではないと思います。忍耐することは数えきれず、中田神父の弱音なんてたかが知れていると感じている方もいらっしゃるでしょう。

それ程多くの場面で忍耐を強いられているのですが、わたしたちは果たして忍耐から何かを学んでいるのでしょうか。ある意味、いちばん多く積み上げてきている徳であるにもかかわらず、そこから学ぶことがあまりにも少ないのではないのでしょうか。そこで今週は、忍耐がわたしたちキリスト信者をどこまでたどり着かせてくれるのか、見極めたいと思っています。

忍耐と言っても、これまでの経験から思い知らされているように、何も学べずに終わる忍耐もあり得ます。憎しみを心に抱いたまま、我慢し続けている。それも忍耐なのでしょうが、おそらくそのような忍耐は不毛なのだと思います。忍耐することで何かをいただく、イエスに少しでも触れることができるように、要点を押さえてみましょう。

イエスの言葉から確かに言えることは、忍耐する人は、命を勝ち取るということです。どんな命でしょうか。「中には殺される者もいる」(16節参照)と仰ったのです。殺されてもなお勝ち取ることでできる命、それは神が与えてくださる永遠の命です。滅びることのない、だれからも取り上げられることのない神の命です。わたしたちは忍耐によって神の命を勝ち取るのです。永遠の命を得るのであれば、それはわたしたちが神と出会っていることと何ら変わりません。忍耐によって、わたしたちは神と触れ合うことになるのです。

忍耐のすばらしさをいろいろな面から確かめることにしましょう。3つ取り上げてみたいと思います。その1つ、まことの忍耐は、愛を現します。誰かの介護をしている人がいるとして、お世話している人の着替えを手伝うこと一つ取り上げても、しばしば忍耐を求められます。まことの忍耐を積む人は、お世話しているその人に、わたしの心の中の愛を現しているのです。あるいは食事の介助をしている時でも、まことの忍耐を積むことで目の前の相手に、またその相手を通して神に、わたしの心の愛を現すことになります。

忍耐が愛を現すことが分かれば、そこから次のことも考えるに違いありません。わたしはこれまで介護に携わってきたけれども、愛を現すチャンスに変えてこなかった。忍耐していたけれども、わたしは苦しい思いだけを積み上げてきた。今日から、愛を現す忍耐へと気持ちを向けていきましょう。すぐにはそうならないかも知れませんが、まことの忍耐は、人間を救うためにあらゆることを忍耐された神の業に、参加するまたとない機会なのです。

次に、忍耐はわたしに与えられた生き方を完成させるものです。結婚生活に置かれている人、修道生活に召されている人、司祭に召された人、いろいろな生き方に神はわたしたちを置いてくださっていますが、いずれの生き方(召命)についても、忍耐なくしてはそれぞれの道を全うすることは叶いません。キリストはそのことを身をもって示してくださいました。イエス・キリストは「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ち、愛をもって互いに忍耐する」(エフェソ 4:2) 模範を残してくださいましたのです。こうして、人としての一生を全うして、わたしに倣い

なさいと招いておられるのです。

忍耐せずに置かれた生き方を全うできるならどれほど楽でしょう。現実には、そんなに簡単なものではありません。どんな生き方に召されていても、たとえ他人からは暢気に暮らしているように見えても、完成するためには忍耐が必要なのです。忍耐する覚悟を持たずに逃げようとすれば、完成できずに人生を終えることになるのです。

さらに、忍耐することによってわたしたちは真の神の子らとなります。神は人間を愛し赦し救うためにあらゆる忍耐を通してこられたのですが、わたしたちがまことの忍耐を積むなら、そのままわたしたちは神に似る者となります。同時に忍耐する人は、心の柔和・謙遜なイエスの弟子となることができるのです。

これほどの高みに、忍耐はわたしたちを運んでくれるのです。以前もわたしたちは数多くのことを忍耐してきました。場合によっては我慢ならないことすら耐え忍んできたのです。ですが、なかなかそのことがわたしを清め、キリストに似る者となる機会に結びついていませんでした。

今は違います。忍耐する時、わたしは一步ずつ真の神の子、イエスの真の弟子に近づいているのです。苦難は忍耐を生み、忍耐する人はイエスによって希望を手に入れるのです。

最後に、聖書の中でいちばん忍耐について話してくれた聖パウロの言葉を紹介しておきます。コリントの信徒への手紙二の引用です。少し長いですが、彼の心の叫びに耳を傾けましょう。

「だれかが何かのことであえて誇ろうとするなら、愚か者になったつもりで言いますが、わたしもあえて誇ろう。彼らはヘブライ人なのか。わたしもそうです。イスラエル人なのか。わたしもそうです。アブラハムの子孫なのか。わたしもそうです。キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。

苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。

しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、苦労し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食わずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました」(II コリント 11:21-27)。

先にこれほどの忍耐を積んだ人が、忍耐によってわたしたちをどこまで運んでくれるか、教えてくださっているのではないのでしょうか。